

まちづくりの取組のなかで、よく使われる「協働」という言葉。それは、目標を共有し、ともに力を合わせて活動することです。昨年4月、地域経営戦略の一環につながる地域おこし、地域活性化策として始動させた「野球によるまちづくり」。この1年で阿南市を訪れた人は約3千人を数えます。市民参加も徐々に増え、野球を通じた交流の輪が広がりをみせるなか、「野球をするなら阿南で」のメッセージに込められた「もてなしの心」と「協働の精神」が、市民の間で浸透し始めています。



1月31日、第83回選抜高校野球大会に21世紀枠として選ばれた新潟県立佐渡高校から、合宿の申し入れを受けます。それは、朱鷺の里として知られる佐渡島からのうれしい春の便りでした。「野球がつかないだ縁、新潟県とは今後面白い関係を築いていきたい。」と、野球のまち推進課は、初の甲子園出場校の受け入れを心から歓迎しました。

この一報は、アグリあなんスタジアムがある桑野地域住民の心にも届きました。「できる限りのことをしてあげたい。」桑野地域振興協議会の呼びかけで集まった有志が、応援幕や看板の製作に取り組みむなど、にわかに歓迎ムードが盛り上がっています。



3月13日午後7時30分ころ、遠絆連の威勢のいい鳴り物が佐渡高校を出迎え。いささか緊張した面持ちでバスから降りてきたラインでしたが、「歓迎佐渡高校」の看板と温かい拍手の出迎えに笑みがこぼれていました。

歓迎レセプションでは、岩浅市長が「阿南で十分練習して甲子園で活躍してください。」と激励。「こんな歓迎を受けるのは初めて。皆さんの期待に応えられるようがんばります。」と、選手の皆さんは目を輝かせていました。

特集 野球でつながるまち、人、そして絆

～ 私たちがめざす 理想のまちづくりが ここにあります ～



高さ4mもある看板。歓迎する桑野地域住民の心の大きさが伺えます。



桑野地域振興協議会会長の谷中勝信さんから仲川主将へ応援幕が手渡されました。

合宿最終日の16日には、阿南高専や小松島高校との練習試合が組まれました。球場に駆けつけた多くの方の温かい声援と拍手が、夢舞台にかける情熱を盛り立てます。3日間の合宿を終えた主将の仲川さんは「すばらしい環境の中で練習をさせていただき感謝しています。この気持ちをプレーで返したいです。」と、気持ちを引き締めていました。出発前には、桑野地域と市が作った応援幕が手渡され、岩浅市長が佐渡高校の健闘を祈念して「がんばろう」を三唱。「俺たちの分までがんばって。」と小松島高校の選手がエールを送りました。人々の心を熱くする野球、そして結ばれる絆。住民と行政が一体となって支えた夢舞台への道。そこには、「野球のまち阿南」がめざした理想の光景が広がっていました。



グラウンドキーパーの西野さんから深井監督さんへ、応援幕が手渡されました。



桑野・山口婦人会が育てた花が優しく出迎えます。



新潟県立佐渡高校野球部合宿 アグリあなんスタジアム H23.3.13～16



練習試合でも大きな声援が送られました。



ファイトの文字が選手の背中を後押しします。



朝夕、道具の運搬を手伝う桑野地域の皆さん。



大声援に送られ球場を後にする佐渡ライン。



昼食の準備も手伝いました。



豚汁でもてなすコスモスレディースの皆さん。



写真を撮りプレゼントした紅露さん。



お世話になった江本さんに挨拶する選手。



荷物の運搬を手伝う桑野地域の皆さん。



帽子を交換して健闘をたたえ合う球児たち。森の中の球場で新たな絆が結ばれました。

また、

夏に

会おう

阿南工業高等専門学校野球部
主将 武田直也さん
(那賀川中出身・3年)



このような機会に対戦することができて光栄です。阿南のPRもできました。佐渡高校は、声が大きく圧力を感じるチームです。甲子園では、決勝戦までいけるよう、がんばってほしいです。

小松島高校野球部

主将 増田大輝さん
(南部中出身・3年)



徳島まで来ていただいた私たちが練習相手として役に立つことができよかったです。チームが一丸となり、選手もきびきびしていて波に乗ったら怖いチームです。甲子園では、思いっきりがんばってほしいです。

深井監督のDNAを受け継げ

昨年の10月に開催された秋季高校野球新潟県大会で準優勝し、初の北信越地区大会に出場した佐渡高校野球部。初戦で長野県2位の佐久長聖高校に惜敗。しかし、離島という地理的ハンディを克服し、深井監督が掲げた「人間力の向上」への取組が評価され、21世紀枠として甲子園出場を果たしました。

佐渡高校野球部
主将 仲川篤志さん

今までで一番すばらしい環境の中で練習をさせていただきました。野球に対する熱い思いがよく伝わってきました。

秋以来の対外試合となった阿南高専や小松島高校との練習試合では、四国の野球レベルの高さを勉強することができました。甲子園では、阿南の皆さんへの感謝の気持ちをプレーで見せられるようにがんばりたいです。



甲子園では、残念ながら初戦で敗退しましたが、佐渡島民約6万3千人の心に残る歴史的1ページを刻みました。深井監督は選手に、「甲子園の土」を持つて返るのは1人だけにして、次はみんなを持って帰ろうと指示したそうです。創部以来、48年目につかんだ夢舞台での経験を糧に、再びこの聖地に戻ってくることを胸に深く刻みました。



深井監督が赴任した平成18年当時、野球部員の生活態度の乱れを正すために作成した60条からなる「野球部心得」。その内容を知ることではできませんでしたが、合宿に関わった桑野地域の人々が口を揃えてこう言います。「選手1人1人に人間教育が徹底されていて関心しました」と。

「人間力の向上」をテーマに掲げ、佐渡から甲子園をめざした深井野球の真骨頂がここにあります。熱血監督のDNAを受け継ぎ、一回りも二回りも大きく成長した君たちにもう一度会いたい。

また、夏に会おう。